

ヒヤリハット活動報告

1. 北海道事業におけるヒヤリハット・きがかかり活動の概要

JESCO北海道事業所では、試運転期間中からヒヤリハット・きがかかり活動に取り組み、潜在的なリスクをくみ上げる活動を積極的に展開している。

当事業所では「きがかかり」については、“起こるかもしれない”という「仮想きがかかり」の提出を推進しており、危険予知的な活動となっている。これにより、日常作業についても「きがかかり」の対象となり、注意喚起を促している。

以下、平成21年度及び22年度上半期のヒヤリハット・きがかかり活動について報告する。

2. ヒヤリハットときがかかりの件数

	平成21年度												合計
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
ヒヤリハット (件)	0	3	1	1	1	1	0	1	0	0	0	0	8
きがかかり(体験)	17	22	7	5	6	9	11	9	13	8	6	9	122
きがかかり(仮想)	27	27	31	43	33	13	53	11	54	56	42	38	428

	平成22年度												合計
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
ヒヤリハット (件)	3	1	2	4	2	2							14
きがかかり(体験)	16	25	7	10	17	11							86
きがかかり(仮想)	66	73	38	71	74	32							354

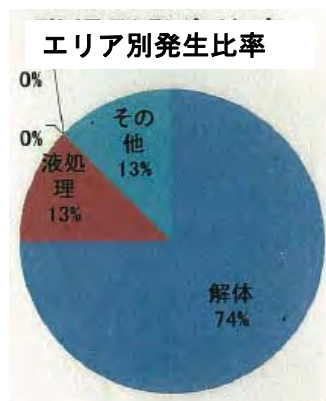
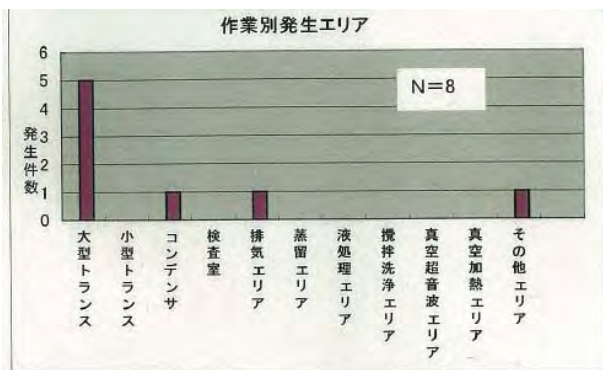
	平成20年度	平成21年度	22年度上半期	合計
ヒヤリハット (件)	31	8	14	53
きがかかり(体験)	106 (36%)	122 (22%)	86 (20%)	313 (24%)
きがかかり(仮想)	185 (64%)	428 (78%)	354 (80%)	967 (75%)

- ・「ヒヤリハット」については、操業当初の20年度は31件と多かった。現場作業が安定してきた21年度は8件に減少したが、22年度は処理台数の増加に伴い増加している。
- ・「きがかかり」については、作業員への提出を促進する活動の実施や操業当社に比べて各自の意識が高まったことから提出件数(特に仮想)が増加傾向にある。

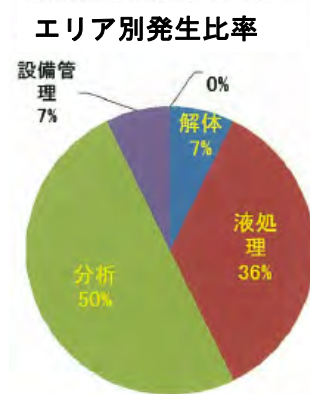
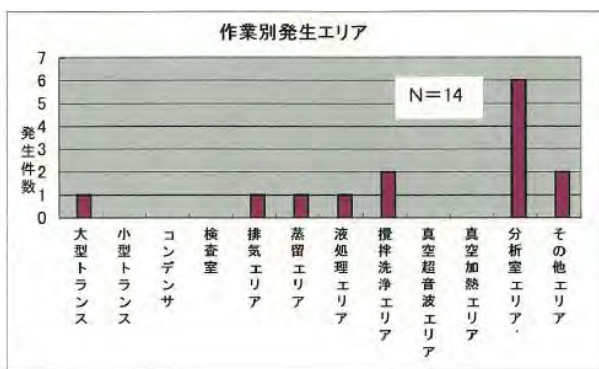
3. 平成21年度と22年度上半期のヒヤリハットについて

(1) 作業別発生エリアとエリア別発生比率

① 21年度

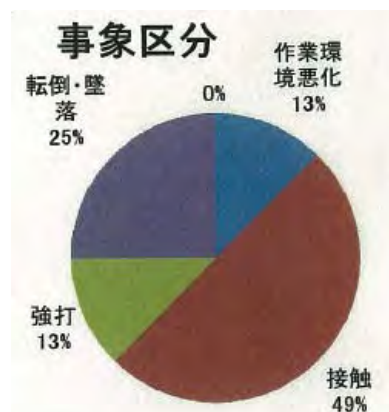
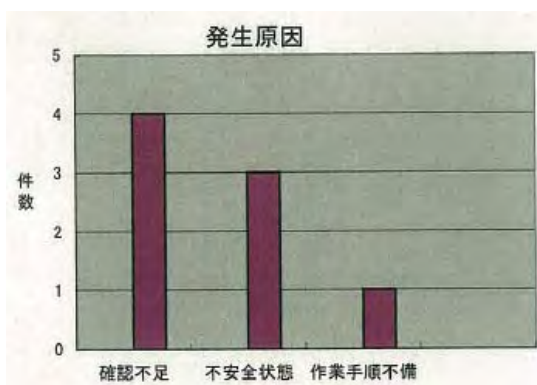


② 22年度

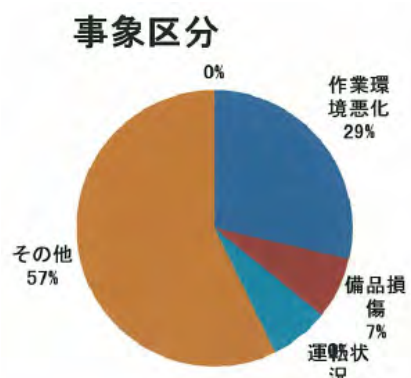
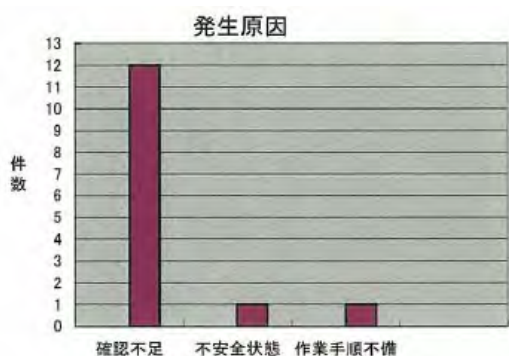


(2) 発生原因と事象区分

① 21年度



② 22年度



(3) ヒヤリハットの事例

年度	ヒヤリハット事例	対 策
21	クレーンにて洗浄かごを吊り上げて移動させる際に、操作を誤って別の操作盤の一部を破損させた。	かご移動の際の操作を低速で行うよう改善した。また、破損した操作盤には保護カバーを取り付けた。
22	高純度の窒素ガス配管に、工業用の窒素ガスポンペを接続した。ポンペが間違った場所に置かれていた。	新品のポンペに識別表示を施した。また、使用する際は、「高純度」の刻印をチェックした上で表示を外すこととした。

4. まとめ

- ・ 21年度は大型トランス解体エリアでの接触事例が多かった。これについては、解体作業員の習熟度不足や現場ルールの未整備などが原因として考えられる。これらのヒヤリハットに対して、安全に作業するための現場ルールの制定し、作業エリアの注意・危険表示の実施や作業要領書の見直しなどを行うことにより、リスクを低減することができた。その結果、22年度上半期については、大型解体エリアでのヒヤリハットは1件にとどまった。
- ・ 22年度上半期は分析室エリアでの経験不足によるヒヤリハットが多かった。これは処理台数の増加に伴い、分析件数が増加したことや作業者の慣れが原因として考えられる。これらのヒヤリハットに対して、チェック機能を強化するなど手順書の改定で対応した。なお、22年度のヒヤリハットからリスク評価(重篤度・作業頻度・可能性に基づく5段階(低Ⅰ～高Ⅴ)評価)をしているが、14件全てがレベルⅠであった。
- ・ 労働安全について、平成21年2月から1年10ヶ月の間、労働災害ゼロを継続している。現場での安全活動は、ヒヤリハット・きがかかり活動のほかに安全パトロールや指差し呼称活動なども継続的に実施しており、それらの活動や作業員の習熟度の向上による成果と言える。
- ・ 今後もヒヤリハット・きがかかり活動を有効活用し、労働災害ゼロを継続していく。

以 上